「妄想綴」

『友、国に帰る』

九谷　六口

私は、三階建てのマンションの三階に住んでいた。張鵬さんが、同じ棟の一階に引っ越してきたのは、平成二十年の春だった。別に挨拶もなかったが、見掛けたところ、私の目には働き盛りの青年と映った。どうやら奥さんらしき女性と一緒の生活のようだ。階段を下りた時に何度か顔を会わせたことがあった。

私は、外国の人だからといって、特別な興味を持つことはなかったが、妙な形で友人のような関係になった。そして、彼は国に帰ることになったが、中国の古い言葉を言い残してくれた。

彼が引っ越してきて一ヶ月程経った頃であろうか、ベランダから下を見ると、庭で物置のようなものを建てている張さんがいた。これは拙(まず)い。このマンションの規約では、庭は共有部分に属し、一階の人たち専有ではなく借りているだけになっている。また、規約内容には、緊急時を考え、造作物等を置いてはならないと書いてある。私は、揉め事は余り好きではない。彼が、日本語を理解するかどうかは判らなかったが、メモを書いて張さんの郵便受けに入れた。

「マンション規約によると、庭は共有部分になっています。物置を造っているようですが、理事会の許可を受けたのでしょうか。両隣を見ていただければ、お判りのように庭には物干し以外にありません」

三日ほどが経った。現理事長から電話が入った。

余談だが、このマンションの理事会の任期は一年で、選出はくじ引きである。理事長は、五人の理事の間で決められる。大抵の場合、理事長選出もくじ引きである。現理事長は、至極、真面目な中年の女性である。

「九谷さん、×××号室ですが、規約違反なんです」

「えー、そんな感じです」

「理事会でも話し合いました。今から規約違反と説明に行くんですが、

一緒に行ってくれませんか」
「でも、私は前年度の理事ですから……」
「お願いしますよ」
結局、同行することになった。

「庭に物置なんかを建ててはいけないんです」
理事長は、今にも泣き出しそうな顔付きで訴えている。
「私は、大家さんに聞きました。庭を自由に使って良いのかと……。大家さんは、構わないと言いました」
「でも、この規約書を読んでください。災害時を考え、庭には造作物を置いてはならないと書いてあります」
「このような物を見るのは初めてです」
理事長が、「生活の栞」を見せた。張さんは、栞に目を通した後で言った。
「大家さんから聞いていませんでした」

面と向かって張さんと話をするのは初めてだった。どう見ても理屈を理解できない人とは思えない。×××号室の持ち主は、いや仲介の不動産屋も栞の存在を伝えてはいなかったようだ。理事長の女性は、感情的になりつつあるように思えた。どうであれ、同じマンションの住民である。感情的な雰囲気は嫌いである。
「張さん、大家さんは話すのを忘れたんでしょう。でも、皆、この規約通りに暮らしています。私、気になってメモを書きましたが」
「えぇ、読みました。でも……」
理事長は、興奮気味である。
「困るんです。規約を守っていただかないと」
「張さん、大家さんが言った事とこの規約、どちらを守るべきだと思います」
可哀相に、張さんは黙ってしまった。私は、言った。
「予定が狂うかも知れませんが……」

「判りました」
理事長は、では、お願いしますと言ってその場を去った。私と張さんの二人になった。
「日本は長いのですか」
「そろそろ十年になります。日本の大学で経営学を学びました」
「で、仕事は……」
「中国の野菜を日本に輸入します」
私は、なるほどと思った。庭に野菜を保管する倉庫を造ろうとしていたのだ。では、このマンションを事務所として使おうとしているのだろうか。だが、これも拙い。規約では、住居としての使用しか認めていない。以前、個人タクシーをやっている居住者が玄関に看板を掲げたことがあった。だが、一週間ほどで看板はなくなった。
「張さん、このマンションを事務所として……」
と言った途端、彼が口を挟んだ。
「倉庫は、別の所にあります。ここは住む所です。たまに野菜を持ってくると思いますが」
どうやら事務所の件は聞いているらしい。
「そうですか。ま、これからも宜しく。縁あってご近所同士になったんだし……」
「はい。宜しくお願いします」

彼は、物置の件を大家と不動産屋に確認していた。彼らは、規約の説明をしていなかったのだ。張さんは、被害者とも言える。話してみれば神経を尖らせるような相手ではない。何となく、張さんが可哀相になってしまった。

一週間ほどが経った。何の気なしに庭を見たが、驚いてしまった。発泡スチロールや段ボールの箱が所狭しと置いてある。しかも乱雑に。目を凝らすと見たこともないような漢字が書かれている。どうやら野菜の名前のようだ。中には蓋が開いたままの箱もある。緑色の野菜や

玉葱のようなもの。中国から届いた野菜なのだろう。
他の住居者の庭は、綺麗に掃き清められ、草花が植えてある。どうにも見苦しい光景である。忙しいのかも知れぬが、置くなら置くで、きちんと並べたら良いのに。ふと、理事長の言葉が甦った。中国の人って周りを見ないのでしょうか。それに規則も守らない。そんな事はあるまいと思っていたが、眼下に広がる光景を見ると、少なくとも周りを見ないのではとの言葉には頷かざるを得なかった。張さんの顔が浮かんだが、だらしない人とは思えない。どうにも理解出来なかった。だが、まだ新しい生活に慣れていないのだ。落ち着けば整理するだろと自分に言い聞かせた。

初夏を迎えたが、庭の状況に変化はなかった。散らかっていたとしても規則違反ではないし、理事でもない私がとやかく言うのもおかしい。努めて庭を見ないようにした。

陽射しが強くなってきた。天気予報では、極暑の夏が来ると言っている。だが、居間のガラス戸を開け放つと、まだ、爽やかな風が入ってくる。そろそろ私の好きな季節の到来である。

私は喫煙者だったが、必ずベランダで吸うようにしていた。部屋がタバコ臭くなるのは嫌なのだ。綺麗な花を咲かせた植木鉢の草花を眺めながら吸う煙草は、格別なものであった。
が……　どうにも妙な臭いがする。中華料理屋の裏口などを通った時の臭いである。まさかと思いつつ庭を見た。
初夏の太陽を受け、乱雑に放り出されている箱の中では長葱のような野菜やニンニクのような球根野菜がぐったりとしていた。
このマンションに越してきて二十数年が経つが、今までこの様な臭いが漂ってきたことはない。精々、カレーやニンニクを炒めた臭いくらいである。私は、戌年のせいか鼻が利く。これから極暑を迎えるというのに、もしもこの状態が続くのであれば、今まで快適であったマ

ンション暮らしは崩壊してしまう。大袈裟なようだが、これでは生きてはいけない。
悶々としているところに、妻が寄ってきた。
「何だか臭うけど……」
私は、指を下に向けた。妻が恐る恐る庭を見た。
「ねぇ、これは良くないわ。散らかっているのも不愉快だけど、これは良くない。貴方、何とかしてよ」
「何とかって言ったって……　どうしろって言うの」
「考えてください。とにかく、この臭いは耐えられません」

数日が経ったが、臭いは益々激しくなっていった。
多分、ご近所も閉口しているはずである。だが、誰も苦情を言ってはいないようだ。そうなのである。余程の事がない限り、ここの住人は文句を言わない。ある意味では節度ある人たちなのである。つまり、他の住居者の迷惑にならないように、慎ましやかに生活しているのである。お陰で、私も快適な毎日を送っていた。
私は考えた。五十数世帯の中で、この臭いに惑わされる住民は、十世帯ほどであろう。理事会に言っても良いが、真面目一方の理事長の顔を思い出すと可哀相にもなる。いや待て、庭の前に住居を構える人たちを考えなければならなかった。彼らは、このマンションに対し、非難の目を向けるかも知れない。何故、放置しておくのか……。
私は、意を決した。張さんに話そう。だが、改まって玄関のピンポーンを押すこともないだろう。ひょんな事で、その機会は訪れるはず。そう決心し、心爽やかに散歩することにした。
私が階段を下りると、何と、張さんが、ライトバンから段ボール箱を降ろしていた。
「忙しそうだね。元気……」
「仕事は、大変です」
「儲かっているの」
「いえ、まだ駄目です」

「ところで……　張さん、人間て、見たくないものがあったら、目を閉じれば済むよね」
「え、えぇ」
「でも、嫌な臭いの場合、鼻を閉じることって出来ないよね。死んじゃうから」
「え、えぇ……。あの……　何か」
「そうだね。回りくどい言い方は失礼だ。あのね、臭うんだ。庭に野菜を置いてるでしょう。あれが臭う」
「エッ！　本当ですか」
「臭う。箱が散らかっているのは、見なければ済む。でもね、臭いは駄目。俺だけじゃない。カミさんも臭いと言っている」
「……」
「張さん……」
張さんは、狼狽しながら言った。
「気が付きませんでした……」

翌日、野菜が入ったままの箱はなくなった。だが、空箱は、散らばったままだった。

たまに張さんと顔を合わせると立ち話をする。彼には、子供が出来ていた。
「どっち?」
「女の子です。大変です」
「儲かっているの」
私は、顔を合わせると、必ず儲かっているのかと訊いた。先入観とは恐ろしい。私は、張さんが金儲けのためだけで日本に来ていると思っている。私の質問に、張さんが不快な表情をしたらしいのだが、気付かなかった。
「いえ、忙しいだけです」

年末を迎えた。大掃除である。我が家では、妻との間に、明確なる家事分担が定められている。大掃除も然り。これは、面倒なようだが、実は違う。自分の分担を処理すれば、後は自由放免なのである。むしろ気楽といえる。

私は、庭を気にしていた。中国では旧正月を祝うと聞く。果たして、彼は年末に庭を掃除するだろうか。これは、無駄な思いであった。大晦日を迎えても庭の状態に、全く変化は無かった。

三月に入った。常としているベランダでの喫煙をしていた。ふと、庭を見た。箱がない。張さんに異変が起きたのか。私は不安になった。色々な事が頭に浮かんだ。彼は、どうしたのか。

階段を下りると目の前にライトバンがあった。張さんの車だ。傍に、彼が居た。

「張さん、元気」

「こんにちは」

「ねぇ、引っ越すの……」

「えぇ」

「何処なの？　東京？」

「中国です」

私は、驚いた。

「国に帰るの？」

「そうです。国に帰ります」

私は、訊きたくなった。

「奥さんと相談したんだ」

「えぇ。妻だけではありません。両親や皆と相談しました」

「皆って、例えば親戚とか、知り合いなのかな」

「そうです。中国では重要な事を決める時には、皆と相談します」

「賛成したんだ」

「皆、帰国に賛成でした。私は三十一歳ですが、中国では私くらいの

年齢になると、これからの進路を決めなければなりません。私は、日本が好きです。見習うことが多いんです。帰国しないのであれば、一生、日本で暮らすことになります。私は、それでも良かったのですが……」

どうやら周りの人が帰国を勧めたような感じだ。

「日本の良さって？　アメリカのように即断しないし、中国のように百年先を見ている訳ではない。中途半端なところがあるけど」

「アメリカは、資本主義に凝り固まり、殺伐としたところがあります。中国は、長い歴史を持っていますが……」

言いよどんだ張さんの言葉を受けて、私は、話した。

「ここ数十年の間にも文化大革命とか天安門事件が起こった。安定しているようで安定していない」

「日本は、今、不景気です。でも革命などは起きない。金儲けに走っているようですが、実際は、血眼になることはありません。落ち着いています。このような生き方が良いのです。日本は好きです」

「地球上には、六十三億の人間がいるけど、その中で中国の人は十三億人。約二割。オリンピックも開かれるし国際化が進む。これからは中国だよね」

張さんは、ニヤッとした。

「中国にいるのは、十三億ですが、世界に散らばっている中国人は多いですよ。二割なんてものじゃありません」

「そうか……そうだね。他の国で金儲けをしている」

私は、張さんが日本に来た理由は、金儲けだと思っている。

「帰国するってことは、充分、金を貯めたってことなの」

「儲かりませんでした。でも……　人生は、金ではありません」

張さんは、柔らかい眼差しで私を見ている。私は、何となく気まずい思いに駆られてしまった。どうやら張さんを誤解していたようだ。

「金は、あった方が良いけど……」

「えぇ。九谷さん、中国に古い言葉があります」

張さんは、中国語で何かを言った。

「中国語は、判らないよ。日本語で言ってよ」
「五文字です。知る。それに足。次は、モノです。人間の方です」
「足るを知る者」
「そうです。そして、ツネ。えぇと日常の常です。最後は、楽しい」
私は、五文字を頭に並べた。
「張さん、足るを知る者は常に楽しい、ってことかな」
張さんは、ニコニコ笑って頷いた。私は、思わず言った。
「戦争もなくなるしね」
「なくなります。九谷さん、私は、三月十五日に中国に帰ります。家は北京にあります。連絡を下さい。是非、来てください。案内します」
「中国に旅行したことはあるけど、北京には行っていない。張さん、嬉しい提案だけど……　そんな余裕はないよ」
「一週間あれば大丈夫です。それに費用は、飛行機代だけです。私の家に泊まってください」
私は約束した事は守ることにしている。この場の雰囲気を考えれば、ありがとうの一言で、笑顔の別れが出来たかも知れない。だが、この言葉は、私にとり約束に近いものである。依怙地なところがある私は、言葉に詰ってしまった。張さんは、真剣な顔付きで見つめている。私は、自分の名詞を出して渡した。
「張さん、帰国したら、とにかくメールを下さい。日本語で書いてくださいね」
「日本には、十年居ました。日本語は大丈夫です。でも、九谷さん、考えておいてください」
私は頷いた。どちらからともなく手を差し出した。結構、長い握手だった。その間中、張さんは私の目を見つめていた。

『知足者常楽』
良い言葉だ。多分、張さんは、この言葉を座右の銘にしているのだろう。力強い握手だった。

私は、この出来事を興奮気味に妻に語った。
知足者常楽……
ところが、彼女はこの言葉よりも張さんの提案の方に興味があるようだった。
「北京……　良いわね。この前は、行かなかったし……行きたいな」
私は、心配になった。何度も外国旅行に行っているが、計画は総て彼女が立て、私は付いて行くだけであった。とにかく旅行は、準備などが面倒である。そうは言っても、旅行先で気分を満喫するのは私の方なのだが。まさか、北京に行くなどと言い出さないだろうな。
「でも……張さんの家に泊まるのは嫌だわ。ホテルね」
「どうして」
「多分、散らかり放題な部屋だと思う」
「えっ！　何故？」
「あの庭を思い出してよ。良い人だと思うけど、整理整頓が出来ない人よ、きっと」
私は、空想し、急に可笑しくなってしまった。
「そうか。可能性はあるね。ニンニクが部屋中に転がっていたりして」
「まさか……」
久し振りに馬鹿笑いをしてしまった。

張さん、今ごろ何をしているのかな。

（了）

妄想綴

「友、国に帰る」

編集・発行者　エムツー・プラデオ
三谷　弘

M²PlaDeO
Planning & Design Office
Copyright© H.Mitani

禁無断転載・複写